

平成 29 年度（通算第 15 回）

国際交流推進協議会

平成 29 年 9 月 13 日（水）  
アルカディア市ケ谷（私学会館 3 F 「富士の間」

Ⅱ. 講演

（3）『邦人を取り巻く国際環境と留学生の安全対策』

講師

外務省領事局海外邦人安全課邦人援護官  
伯耆田 修 氏

外務省の伯耆田と申します。よろしくお願ひいたします。

私は、2年前にも同じような講演をここでさせていただきました。2年前には、企業、団体、そして大学から講演依頼があり、領事局では、年間45件ぐらい講演を実施しました。それが昨年では100件を超え、本年には昨年以上に講演依頼があります。テロも世界各国で発生しておりますし、関心が非常に高くなってきたというのが現状でございます。

特にテロになりますとニュース等で大きく報道されますので、怖いというイメージがあるかもしれません。テロを未然に防ぐことはできません。ただ、リスクを下げる方法はございます。今回はその方法を私のほうからご説明したいと思っております。

時代とともにテロの情勢は変わってきておりますので、はじめに世界のテロの情勢がどうなっているのかを説明します。次に、私どもは海外においていろいろな緊急事態が発生し、これに対応しておりますので、緊急事態体制はどのように構築するのか、家族対応はどうするのか、プレス対応はどうか、といったことを具体的にご紹介させていただきますので、皆さま方の参考にしていただければと思います。

そして、大学生や留学生の被害は、パターン化していますので、具体的にご紹介いたします。

その後、海外での犯罪は日本とは手口が違いますので、どのような違いがあるか、ご説明します。そして、外務省が海外における安全対策の取り組みとして情報発信しているものがありますので、それについてもご説明いたします。

## 1. テロの情勢

それでは世界のテロ情勢はどうなっているかご説明いたします。

イスラム過激派組織は、アフガニスタンではタリバン、イラクやヨルダン、シリアを中心としたISIL、ソマリアのアル・シャバブ、イエメンのアルカイダ、そして、ナイジェリアではボコ・ハラムが活動しています。このようにイスラム過激派が様々な国で活動しています。

特に、活動が活発化していたのが約3年前。これはISILの支配地域が一番広がった時期です。この時には合計でだいたい3万人の戦闘員がいました。その内の半数の1.5万人が外国人による戦闘員でいたと言われております。

3年前には、ISILは、「ISILの国を作るので、シリアやイラクに移住してこい、集まって一緒に戦おう。」と言っていました。そして、戦闘員が増えていき、中東やアフリカを中心としたテロが非常に多かったです。これが3年前の時期です。

今はどうなっているのかと言いますと、周辺国では、シリアやイラクの国境を厳しく管理していますので、シリアやイラクに入国しようとする者が入国できなくなりました。その上、各勢力の攻撃によりISILの支配地域は徐々に失われていきました。

外国人戦闘員は3年前に1.5万人ですが、支配地域が減るとどうなるか。全員が亡くなっているわけではありません。一部は母国に戻ります。アメリカの調査機関によりますと、3年前にシリアやイラクで活動した外国人戦闘員は、フランスが一番多くて1800名、イギリスが760名、ベルギー470名です。この人たちが母国に戻ってテロ活動をする。あるいは、イスラム過激思想に感化された者によってテロが引き起こされたと言われております。現に、フランス、イギリス、ベルギーにおいては、地下鉄、空港、路上、あ

るいは観光地といった人の集まる所でテロが多く発生しています。

現在、ISILは「今いる居住国でテロを敢行せよ。」と呼びかけています。このため、先進国、東南アジアにおいてもテロが発生し始めています。これが全体的な現状でございます。

また、どのような種類のテロが起きていたのかといいますと、昔は爆破テロ、それから自動小銃を使った銃撃テロでした。しかし、今は車両を使ったテロが多くなっています。これは、ISILが、「身近なものを使ってテロを敢行せよ」、具体的には、「車両を使え、ナイフを使え、放火せよ」と機関誌で訴え始めたことから、車両を使ったテロが発生しているといえます。

フィリピンにおいてもテロが発生しています。終結しつつありますが、フィリピンのマラウィ市は、イスラム教徒の都市で、5月末よりイスラム過激派によって占拠されており、フィリピン空軍による空爆等が行われ、今までに死者が800名以上に達しています。このように、東南アジアでも過激派組織による活動が活発化しつつあります。

テロは、中東、北アフリカから欧米諸国、アジアの地域へと広がっております。そして、ソフトターゲットに対するテロが増加しています。観光地、コンサート会場、空港、市場、ホテル、レストラン、路上など、われわれが活動をするようなところでのテロが増加しています。また、一匹狼型の犯行、更には、そこで生まれ育った者がイスラム過激思想に感化し犯行に及ぶようなテロに変わってきております。

テロを回避するもとはできませんので、テロの被害に遭うリスクをどれだけ下げられるかということだと思います。イギリスでコンサート会場における爆破テロがございました。あのテロもおそらく気をつけていれば、テロの被害には遭わないと思います。この時には、コンサートが終わった直後の出入り口近辺で爆破が起こっています。このような場合、回避する方法は簡単です。自分の席に15分位座っていればいいんです。そうすればテロに遭いません。なぜかと言いますと、テロの実行犯というのはなるべく多くの者を殺そうとしますから、人が集中する時間帯であるコンサート終了直後を狙います。ですから、その時間をずらせばいいだけなのです。

また、入場時においても注意が必要です。それは、コンサート開始直前は、一番混んでいる時間帯ですので、テロの被害に遭うリスクを下げる方法としては、なるべく早くコンサート会場の中に入ればいいということです。

ホテルにおいてもテロは発生しています。発生場所は、ロビーが多いのです。従いまして、ロビーにいる時間をなるべく少なくする方法を考えるということです。例えば、夕食時に、「ホテルのロビーで7時に集合しよう」では、ロビーにいる時間を長くしているわけですからリスクを逆に上げてしまいます。リスクを下げる方法はどうか。たとえばチェックアウトするときには、前夜にチェックアウトを済ませてしまえばいいのではないのでしょうか。そうしますと、出発当日はロビーにいる時間を最小限にしてチェックアウトすることができます。リスクを下げるとはこのような方法を考えるということだと思います。

私もテロが発生しているところに出張する機会がございます。そのときには、部屋の取り方にも気をつけています。一番よい部屋の取り方は、ホテルの正面に向かって裏側の6階から9階、これが一番安全な部屋です。それには理由があります。通常、テロは、ロビーの1階において爆発テロや襲撃テロを行いますから、その被害が及ばない6階以上とい

う意味です。しかも、車両、トラック等を正面玄関付近に置いて爆破させたり、正面玄関から襲撃テロを行いますから、そのような観点から裏側のほうが安全という意味です。数百キロの爆薬を積載した車両を爆破させた場合には、ホテルの前面部分が全部削げ落ちるくらいの爆破能力を持っていますから、裏側の部屋を予約したほうがより安全といえます。また、なぜ9階なのかと言いますと、火災が発生した場合はしご車が届かないという意味です。このような点を気をつければ、ある程度テロに遭うリスクを下げるすることができます。

また、空港でテロが発生している場所は搭乗手続きをする場所です。セキュリティチェックをした後の場所での犯行はありません。そのため、搭乗手続きをする場所にいる時間をなるべく少なくする。空港のオープンスペースでショッピングや食事をするのではなくセキュリティチェックを終えなるべく早く空港内に入り込む。このような注意が必要であるということです。

テロの標的として地下のレストランやディスコが狙われています。狙われる理由は、地下のような密封空間では爆破力が増すこと及び出入り口だけを押さえれば中にいる者を一網打尽にできるからです。このようにレストランの選び方においても考えなければいけない面があるといったものです。その次に、危険な場所としては建物の1階部分です。2階以上ですと、襲撃テロの場合は2階まで時間をかけて駆け上がってテロは実行しませんので、このようなことも気をつけながらレストラン選びをすればテロの被害に遭うリスクを下げる可以说是といったものです。

2015年2月にはシリアにおいて邦人が殺害された映像が公開されました。2015年10月にはバングラデシュ北部での日本人殺害事件が発生しました。そして、ISILの機関誌では、「日本人と日本の権益を標的にせよ。」と謳っています。10年ほど前ですと、日本人はテロの被害に遭うかもしれないという状況でしたが、今では日本人だから殺される可能性があるといえる状況に変化しています。

ISILの機関紙では、テロの実行方法として、最近では、「ナイフを使え、車両を使え、放火せよ。」と謳っています。このため、車両によるテロが増えているというのが現状です。

また、テロは多くの人が集まる所を標的としているため、イベントやコンサート等に行かない方がよいと考える人がいると思いますが、このように考えるのではなく、人が集中するコンサート開始直前や終了直後の時間帯に移動しないといったことを心がけることが重要だと思います。

## 2. 緊急事態における在外公館の対応ぶり

次に、緊急事態が発生した場合に私どもが具体的にどのような体制を構築するかご説明します。去年の7月1日、バングラデシュのレストランに対する襲撃テロが発生し、7名の方が亡くなり、1名の方が入院された事案です。

当時、ダッカのバングラデシュ大使館には18名の館員がいました。あとは現地職員がいました。対応するためには、あと何名必要かを考えます。7名の方が亡くなり、1名の方が負傷されていますので、1被害者に対して1名をリエゾン（連絡係）として張りつけます。その他、情報収集や各種調整する総務担当、政府専用機受け入れ、プレス担当、副大臣周り、ロジの担当が必要と考えましたので、日本や近隣の在外公館から約40名の応援部隊が現地入りしました。

体制を構築するためには、現地においてどういう仕事がどのくらいのボリュームであるかということを考えながら役割分担と必要人数を決めていきます。領事関係で言いますと、殺害された場合には現地において司法解剖がなされます。ご遺体をどうするか。歯型や指紋あるいは DNA によって同一人確認を行うのか。現地で茶毘に付すのか、ご遺体を日本に搬送するのかを決めていただき手続きを進めていきます。

ご遺体のご対面に際しても、国によって宗教や死生観あるいはご遺体の取り扱いが日本とは全く違いますので、日本人の死生観や感情に合った対応をするよう心がけ、現地の警察や葬儀社と調整します。

また、入院者についても、現地で治療を継続するべきか、または日本に緊急搬送するべきか現地の医師や保険会社、日本の医師等と調整しながら対応します。ここではご遺体の搬送という言い方をしていますがご遺族の前では、ご帰国という言い方をするよう心がけています。これは印象だけなのですけれども、ご遺族の方がどういう思いを持っているかということをお考えながら対応しているといったものでございます。

2011年2月22日のニュージーランドでのクライストチャーチ大地震では、留学生が28名行方不明になり、4名の方が負傷しました。現地の私どもの領事事務所が入っているビルも倒壊しました。そのときに何から始めるかと言いますと、私どもの宿舎、緊急対策本部とする部屋、ご家族への説明会の部屋を確保します。そして、私どもはご家族の方が何を要望されているのかを考えて、毎日、ご家族全員に対し救出状況の全体説明会を、その後にご家族個別の相談の場を設けました。4家族ごとに一人のリエゾン（連絡係）をつきめ細かく対応するようにしました。

ご家族も自分の子供を早く救出してもらいたいという気持ちが強い一方、私どもとしては直接救出活動をしているわけではございません。ご要望に応えられないケースも間々ありましたので難しい対応を求められ、精神的にも厳しい対応を求められました。

この家族対応は誰にでもできるとは思っていません。ですから私どもでは、海外緊急展開チームのメンバーとして指名を受けて、この者だったら現場で対応可能であろうという者を現地に投入しています。分野別に言いますと、領事、プレス担当、ロジ担当、医者を指名しています。

2015年4月25日、ネパールでのネパール大地震における安否確認についてお話しします。まず、一般的な安否確認作業は、在留届と「たびレジ」の登録者のデータに加え、ツアー客がいないか旅行会社に確認し、また、日本人が多く利用するホテルに照会して安否確認の基礎データを作成します。

安否確認作業は、メールを一斉送信し、無事か助けが必要かを返信して頂きます。SMSシステムを導入している国については、SMSを通じて同様に安否確認を行います。

その次に、メールや電話等を利用して、日本人学校やJICA、団体、企業ごとに安否確認作業を進め、最終的には、個別に本人宛あるいは日本の留守宅に連絡して安否照会を行います。

また、安否照会を私どもにするとすることは、ご本人と連絡がつかない、被害に遭っている可能性があるといったことですので、私どもの大使館や外務省では優先順位を上げて安否確認作業を行います。

ある程度、安否確認作業が進みましたら、ネパールの出入国管理局の出国データ及び日

本の入国管理局の入国データと照合して、ネパールから出国した者及び日本に入国した者は安全確認できたとして作業を進めていきます。

2015年3月18日、チュニジアのチュニス市近郊にあるバルドー国立博物館にて武装集団による銃撃テロが発生し、邦人3名が死亡、3名が負傷した事件が発生しましたが、入院されている方やご遺族の方々にプレスからの取材が殺到しましたため、対応に苦慮しました。

大学の皆様方はプレス対応に慣れていないと思いますが、そこで撮った映像やコメントがプレスに流れますとそれが様々な方面に拡散されます。国民はどういう思いで見るとか。そういう点で言うと、やはり見た目が一番大切だなという感じを持っています。海外においてテロの被害に遭った企業関係者について企業側が対応振りを誤ったケースをご紹介します。これは、企業の幹部の方が現地入りしましたが、幹部の方がポロシャツを着てジーパンをはいてご家族とお会いし、かつ、ご家族の質問に対して満足に答えることもできなかったというものでした。ご家族にとって、幹部の方の服装は礼を欠き、「その格好は何ですか。」という思いだったと想像できますし、企業に対して非常に不信感を生じさせていました。この観点で言いますと、やはり、見た目は大事で、ネクタイをし、上着を着て、姿勢、表情、視線といったことを注意しながら対応することが重要だと思います。

その次に重要なのが言葉遣いです。一人一人年齢や人格性格、理解度が違いますので、その人に合った対応をする必要があります。声のトーン、強弱、話す速度、言葉遣い等、人によって対応を変えて対応することが大切だと思います。

フォローアップとしては被害に遭った方やご遺族は、事件が終わった段階で全て終わったわけではなく、1年たっても3年たっても、あるいは20年経っても事件について忘れることはありませんので、記憶に留めて、後任者にも引き継ぐことが大切だと思います。私どもは、海外にいと大きな事件に遭遇していますので、必ず後任者に引き継いでいます。皆さま方でご存じの方は少ないと思いますが、40年前、スペインのテネリフェ空港の滑走路において旅客機同士の衝突事故により583名の方が死亡する事件があり、日本人の方も35名の方が亡くなられた事件がありました。ご遺族の中には、事件後、20年経過しても毎年、スペインに来られ、空港敷地内に建立されている慰霊碑の前で献花を行っている方もおりましたので、やはり犠牲者が発生した事件・事故については忘れず、必ず引き継ぐことが必要だと思います。

プレス対応について申し上げます。まず、取材は、事件・事故が発生した現場、ご遺族が利用する空港、入院されている病院、日本の自宅や親族宅、所属企業において行われます。ここでどのような対応をするかということを考えます。例えば、代表取材、通常取材、書面による取材といった方法が考えられます。

今年に入って、新たなプレス対応策を講じ、よい結果がでた事案がございました。それは、死亡事案が発生した場合、ご家族に対して「今のお気持ちはどうですか」という質問をよくされます。これに対し、ご家族は、そっとしておいていただきたいという感情を持たれるのが一般的です。他方、何も答えませんと一言でも気持ちを聞き出したいと取材攻勢が強くなります。そのため、ご家族に対し、今のお気持ちを書面に書いていただいて、全ての報道機関各社に配布されれば取材攻勢が弱まるかもしれませんと提案したところ、これを受け入れていただき、ご家族の心情を報道機関各社に配布したところ、取材攻勢が

なくなったという事案がございました。

在外公館による緊急事態対応として申し上げますと、自分自身ではどうしてもなく助けが必要だという事案が発生した場合には24時間いつでも在外公館または外務省の代表番号にお電話頂ければ対応できる体制を構築しております。因みに、夜間や土日の対応としては、在外公館では、委託業者経由、外務省では当番者経由で担当者に必ず連絡が取れるようにしております。

在外公館が被害者あるいは被害者ご家族への対応としては、私どもがご本人やご家族に代わって何かをするというわけではなく、ご本人やご家族に寄り添い、助言やご支援するといったもので、ご本人やご家族の意思というものを尊重して私どもがそのお手伝いするというものでございます。

日本人大学生・留学生の被害事例は、交通事故、女性被害（性犯罪・殺人）、水難事故、強盗などが多く、この中でも特に交通事故が非常に多くなっています。原因は、速度の出し過ぎや無謀な運転、定員オーバーといったものです。殺人事件の防犯対策としては、見知らぬ人を信用しない、ついていかない。そして、犯罪に遭った場合には抵抗しないといったことがポイントとなります。

### 3. 海外における日本人の犯罪被害・トラブル

海外における日本人の犯罪被害・トラブルの中でもっとも多いのが窃盗案件で、全体の95%を占めます。犯罪の手口としては、○コイン・クレジットカードをばらまく、カギ束を落とす。○衣服にケチャップ、ソフトクリームをつける。○エスカレーターの降り口で立ち止まる。○列車・バスの外から窓をたたく。○ぶつかってくる、押される、転ぶ、子供が転ぶ。○声をかけられる、大声を出す、時間を聞いてくる。○紙幣やハンカチが足元に落ちてると指摘される。○地図を持って、道を聞いてくる。○物乞い、路上での小物売り。などがございます。日本では単独犯がほとんどですが、海外においては、気をそらす者1~2名、スリ・置き引きする者1名、スリ・置き引きした物を持ち去る者の計3~4名の犯行グループによるものが多いのです。そして、1秒でも目を逸らすことができればスリや置き引きされます。具体的には、荷物が置いてある反対の方向から、通常は時間を聞いてきます。叫んだり、肩を叩かれるケースもあります。「すみません」と声がけされ、振り向いたらそれで置き引きされます。従いまして、荷物を手から放さないといったことが重要だと思います。

ホテルの部屋にあるセキュリティボックスが狙われたこともありました。ホテルのセキュリティボックスに貴重品を置くことは普通です。通常、ご使用いただいても問題ないと思います。ただし、セキュリティーボックスに保管した場合でも100%安全というわけではないといった例をご紹介します。犯人は観光客の後ろから付いて行って部屋番号を確認します。その後、観光客が部屋を出て、ルームメイドさんが部屋に入るのを待って、犯人は部屋の住人になりすまして部屋に入り、ベッドメイキングが済むのを待って「ありがとう」と言ってチップを渡します。そして、ルームメイドさんが部屋から出ていった後、犯人は部屋の中からフロントに電話をかけ「すみません、セキュリティボックスの暗証番号を忘れたので開けてくれませんか」と依頼し、セキュリティボックスを開けてもらい、中にあった貴重品を全て盗んでいったものでした。このように非常に犯行手口が巧妙なケ

ースもありますので、こうすれば完璧に安全対策が講じられるとったものはないと思っていただくことも必要だと思います。

クレジットカードを利用する場合には、金額のゼロを加筆され、確認せずにサインをしたため一桁多くの金額を支払わなければならなくなったケースもありました。1000ドルの品を買ったとしますと1万ドルを支払うこととなりますので、サインする時には必ず金額を確認するといった注意が必要です。

女性がホテルに宿泊する場合、部屋のドアは最後の砦と考え、ロックされた時には直ぐにドアを開けるのではなく、防犯チェーンをかけてドアを開けるよう心がける事も必要だと思います。

スーツケースにアルファベットで名字のシールを貼っている方はいますでしょうか。例えば、スーツケースにサトウさんでしたらSATOというアルファベットのシールを貼ってあるとしますと、どのような犯行が行われるのかをご紹介します。これは、税関職員と犯人グループがグルになっていたケースでした。まず、税関職員が、荷物をチェックし、金目のものが入っていることを見つけた場合には、税関の出口近辺にいる仲間にトランシーバーやメールで、「SATOというシールを貼ったスーツケースを狙え」と指示をします。そうしますと、仲間は、A4版の紙に「SATO」と書いて掲げサトウさんが近づいてくると「サトウさん、お待ちしていました。こちらへどうぞ」と自動車がある所に誘導します。そして、スーツケースを先に車に乗せますからと先にスーツケースを乗せられて、そのまま車は発車されてしまったケースでした。このような手口が現実問題として起きていますので、自分の身分事項がわかるようなものを誰にでも見られる状態にはしてはいけないといったものです。

睡眠薬強盗も注意が必要です。ビールやコーヒーに錠剤を入れるケースが多いのですが、睡眠薬を練り込んだクッキーを使用する場合があります。睡眠薬は、即効性かつ強力でクッキーを1個食べて24時間眠り続けた方もいます。知らない方は信用せず、進められた物を口にしないとといったことが重要です。

最近、被害が一番多いのは、スマホを狙った強盗です。スマホは10万円ほどする高価なものですので狙う価値はあるのです。日本では、屋外でスマホを使うのは当たり前ですが、海外においては屋外で使用するのは差し控える。使用する場合には必ず屋内で使用するといったことを心がける必要があります。

家族にどこに行くか伝えず映画館に行ったことで、誘拐に利用されたケースもありました。まず、大学生が家族に行き先を告げず映画館に行きます。犯人は、大学生が映画館に入ったことを確認した段階で家族に電話をして「娘を誘拐した。解放してもらいたかったら、1時間後に日本円で20万円ほどのお金をどこどこに持ってこい。」と指示をしました。映画を見る人は、スマホの電源を切るかマナーモードに切り替えているためスマホに出られないので家族は娘が誘拐されたと思ひ込みます。しかも、すぐに手配できそうな20万から30万程度の身代金を要求し、犯人は簡単に身代金を受け取ります。このような事件が実際に発生しております。

現地の法律・風習・習慣に関するトラブルも起きています。インドネシアやタイでは頭には精霊が宿っていると信じられていますので、頭を撫でると非常に嫌がられる。不謹慎だと思われる。特に不浄の手と言われる左手で頭を撫でた場合には、とんでもないことと

なります。このように現地の風習や習慣を知っておくことも重要です。

足の裏を見せることは失礼に当たることから、足を組むのを避けた方がよい国もあります。

実態的に女性の運転を禁止している国があります。海外で運転免許証を取得して運転することもできますが、その国では女性に対して運転免許証を交付していないのです。従いまして、女性が運転していると、警察官に止められてしまうケースが多く、トラブルの原因になるといったものです。

現実的な問題として起こった事案は、子供が学校の授業の作文で「いつもお父さんとお風呂に入って楽しい」と書いたことがありました。具体的には、「いつもお父さんとお風呂に入って楽しい。」と書いてあったところ、警察に通報され保護者が児童ポルノ違反容疑で一時拘束されています。アメリカでは児童ポルノやDVに対し厳格に対応しています。

同様に、かわいそうな事案としては、子供が眠っていたので、母親が子供を車内に置いたままコンビニで買い物をした事案です。ほんの数分間のことでした。これは、小さい子どもだけを車内に置いていたということで年少児監護義務違反として母親が一時拘禁されたというものでした。

DV関係では日本では問題にならないような、夫婦げんかで夫が妻の腕を強く引っ張ったり、親が子供の頭をたたくといった事案でも一時拘束されることもありますので注意が必要です。

交通事故に遭遇しますと、日本では車を安全な場所に移動してから、救急車や警察官を呼びます。しかし、国によっては、証拠隠滅として罰せられることもあるため、どんな交通渋滞となろうと車をその場所から移動してはいけないという交通法規を持っているところもご紹介します。

#### 4. 外務省からの情報発信

外務省のホームページにはたくさんの情報が掲載されていますので是非参考になさってください。

危険情報は、治安情勢やその他の危険要因を総合的に判断し、それぞれの国・地域に応じた安全対策の目安をお知らせするもので、レベル1～レベル4までの4段階に分かれています。最近では、車両突入事件が多くなっていますが、「ガードレールや街灯や遮蔽物があるような歩道を使ってください」と、具体的に注意喚起しています。

それから感染情報の危険情報もご紹介します。安全対策基礎データには、渡航・滞在先の犯罪発生状況、出入国手続、滞在時の留意事項、その他風俗、習慣、病気など安全に関する必要な情報が詳細に記されていますので参考になると思います。

危険情報は、一番注意してご覧頂きたい情報ですが、掲載内容を注意深く読み取って頂きたいという点でもご説明します。例えば、欧米諸国は白表示となっており危険な地域の表示とはなっていません。しかしながら、例えば、地図は白表示となっていますが、イギリスとフランスでは「特別な警戒が必要です」、ドイツでは「テロに注意してください」、ベルギーでは「テロに警戒してください」と掲載されています。このように、国によっては表現を変えて注意喚起をしていますので、この表現に沿った対応を考えて頂きたいと思えます。

在外公館ごとに「安全の手引き」を作成し、ホームページに掲載されています。住居の選び方、運転する際の注意事項日常生活における注意事項といった細かい点についても掲載されていますので参考になると思います。

最後に、在外公館では、テロ、自然災害、デモ等が発生した場合には、どのような事案が発生し、何に注意しなければいけないか、「たびレジ」と「在留届」の登録者にメールで一斉配信していますので、必ず登録するようよろしくお願いします。迅速に情報を入手することが二次被害を受けないためには有効な手段となりますのでよろしくお願いします。

以上、簡単ではございますが、私の講義とさせていただきます。

(以上)